「今度は底釣りだよ〜ん」と言っていた江成。
締め切り間際、いや、締め切り後に届いた原稿を読み、
里ちんは愕然とした。
「すげぇ…」
濃い。濃すぎるぜアニキ…！
江成のネチッこいインタビューが、
希代の名手として名高い北城 錦の凄みを
極限まで炙り出すことに成功している。
ある意味、これは現代へら鮒界に起こった奇跡だ…！ by里

この物語は、
栄光、そして挫折を味わい、
今、再び這い上がろうとする一人の男の人間ドラマである。

江成公隆の トーナメンター、復活への道。

text and photo by Kimitaka Enari and Satoshi Tanaka
業界初、Web連動企画！ 〈URL〉http://hesar.yokohamatsurumi.net

佐原水郷が生んだ奇才・北城 錦登場!!
〈Vol.7〉北城 錦の底釣りゼミ① in中島屋（!?）

あけまして〜は来月号に送るとしますが、新年号ということなんでちょっとだけわたくし江成よりみなさんにご挨拶を…。

里ちん改め新編集長より、新年号より5ページになると告げられてしまいました。2ページも3ページも経験しているけれど、5ページは初めて。5ページを埋めるという事は、釣行回数の少ない僕にとって、毎月の釣りの全てをこの企画にあてなければならないというプレッシャーになる（今でもそうですが）。といっても、釣行回数は月1〜2回。増やせないのが現状。そこで今後は、釣りと関係のないハナシが増えそうな予感。日頃感じた事や職場のグチなど、くだらないハナシで字数を稼ぐ事もありそう…。全国誌で個人的なことをだらだらとブチまける事が許される？私は幸せ者です。勘弁してやって下さい。

グチといえば、最近は職場でもあまり暴れなくなりました。一旦グッと堪える事が出来るようになりつつあります。某管理釣り場での失態以降、自分の行動を振り返ればあまり他人に対して厳しいことは言えないやと益々感じるようになりました。少し大人になれたような気がします。ページ増と合わせ、今後家庭にグチを持ち込む事も無くなりそうですね。

先日、夫婦共通の十年来の友人の結婚披露パーティに出席しました。彼女の人生も色々あったので、思い出す度に気掛かりでしたが、ついに素敵なパートナーに巡り合えたようで。本当におめでとう。他人の結婚式でこんなに感動するもんだったかなぁ。「宝くじでも当たらねーかなぁ」なんて考えながら流されていく日常の中で、久々に今生きている事の幸せに気付かせてくれる事件、エネルギーをもらった感覚、そんな感動でありました。それから、新編集長も結婚おめでとう。暖かい家庭を築いて下さい。今気付いたけど、この二組に共通するのはどちらも姐さん女房なんだなぁ。

さて、「北城 錦の底釣りゼミ」。濃いです。ハマり過ぎて失神しないように！

神様と私。

さて、本題の「底釣りゼミ」に突入する前に、少しだけ前口上をお聞き下さい。

今月のゲスト講師は北城 錦氏。「へら鮒」でも連載や特集に出演されていたので、御存じの読者も多いハズ。しかし、最近の若い読者の中には、氏の最近の記事が釣り場紹介などのソフト路線が多かったため、本当の実力を知らない人もいるかもしれない。今月分の本編を削ってでも紹介しない訳にはいかないだろう。

名門・北斗へら鮒会（日研・北斗支部）で、常に三役に名を連ねる「野」のスペシャリスト。年間優勝も一度や二度ではない。佐原の鬼才。近年は自ら主宰するヘラメイトクラブで、後進の指導に熱い。へらウキ「にしき」作者。

名門と呼ばれる大所帯のクラブの中でも、比較的大人しい？会員が多い北斗。例会時も、場所取りやボート競争もなく非常に紳士的。これは、佐藤徳通会長の人徳のなせる業であろう。そんな会風からか、やはり北城氏も控え目な紳士である。あまりムダな事は語らないし、進んで自らをアピールする事もない。しかし、僕の中では間違いなく有名インストラクター級である。いや、それ以上かもしれない。以前、壁にぶつかり悩んでいた僕の底釣りに、要所要所で的確なヒントを授けていただいた。当時、この人は「神様だ！」と、電流が走った記憶がある。それ以来、理詰めに走りすぎる僕をいつも諌めてくれた氏であるが、過去も今回も僕の質問に全て即答であった。

実は氏こそ、経験に裏打ちされた本物の「理論派」である。

ベテランと呼ばれる名人達の中で、こちらの質問に対し明解な回答をしていただける方はあまりそう多くはないと僕は感じている。「そういうものだ」と経験則で語られてしまう事が多い。自己完結してしまっているのだ。もちろん、それはそれでいいのだが…。そういう意味で、北城氏は非常に貴重な存在である。

北城 錦の「へら釣り観」。

今回からのテーマは底釣りである。北城氏はもちろん何でもスペシャルなオールラウンダーだが、僕にとっては氏の底釣りが特に印象深い。テーマを底釣りと決めた時、まっ先に浮かんだのが氏である。底釣りにテーマを決めた理由は色々あるが、一番は今年のジャパンカップの優勝者が底釣りだった事だ。振り返ってみると、メジャートーナメントでも実は底釣りの優勝者は少なくないのだ。浅ダナに目が向けられがちなトーナメントにおいて、底釣りも必須科目である。今回のジャパンカップは両ウドンの底釣りであった。後日岡田氏（優勝）とも萩野氏（三位）とも話をする機会があったのだが、二人とも両ウドンは不慣れであるという。萩野氏にいたっては、ほぼぶっつけ本番であったとも言う。しかし上位に食い込めたのはなぜか。二人とも好き嫌いのないオールラウンダーである。つまり、日頃の釣りを応用して釣っていたのだ。

もちろん両ウドンのスペシャリストがその場にいたら結果は分からない（いずれどなたか御登場願います）。しかし、極度の食い渋りに対し、数えられる程の粒子しか散らさない究極のノーバラケ「両ウドン」を選択した後は、日頃のウキの動かし方を実践するだけだったのだ。不慣れな釣りのため、ドロやのりなど思うようにコントロ

10年前の氏自身の記事も再検証。マジです

ール出来なかったという萩野氏だが、やった事のない釣りでさえも選択肢に入ってくるその柔軟さに、彼の非凡さを見た。

北城氏にこの話をすると、「へらのあしらい方には宙も底も区別はないし、ダンゴもウドンもないよ」という力強いコメントをいただいた。加えて、「最も大事な事は、どのへらをターゲットにするかだ」とも。この二つのコメント、僕は久々にガビーンときた。

まず、「あしらい方」という言葉がツボにはまった。エサ合わせひとつとってみても、食わせる事だけを考えるのではなく、寄せやジャミ・ヨタベラの事なども考えるわけだから、語感的にはこちらの方がいい気がする。また、「エサ合わせ」では、セッティングを含めた釣りの組み立てという部分を含まないため、一つの言葉で済む「あしらい方」は素晴らしい言葉だと思う。

「どのへらをターゲットにするか」については、僕にとっては釣り堀のカッツケが全ての出発点のため、つい忘れがちな部分である。ウキを動かしたへらを全て釣ってしまいたくなり、気付けばガリベラばかりという悲惨な結果になる事が多い。耳の痛い話だ。一般的には、管理が主体の人でもペレ宙や両グルなど型の違うへらを狙う釣りがあるし、「今さら何を…」と感じる人が多いだろう。しかし本編で紹介していく「野」出身の北城氏ならではのコメントを理解する上でとても重要な部分なので、その事を頭に入れて読み進めて欲しい。

考えてみれば、数ある釣りジャンルの中で、管理釣り場があるジャンルは多くない。放流の有無は別として、フィールドで言えばほとんど全て野釣りなのだ。自然観察から始まって、魚の気持ちを考えていくのが当たり前なのである。管理釣り場の釣りだけで競技が成り立ってしまったり、野釣りを否定する釣り人さえ存在してしまったりするジャンルはへら釣りだけだろう。きわめて特殊な釣りジャンルである。

「野」出身者ならではの感覚は、管理釣り場では養えないものである。しかし、管理に通じる要素はたくさんある。もちろん逆もある。全て「へら釣り」なのだから。単に「管理釣り場専門の若造が」的な発想では決してなく、「トーナメントで必要だから底もやるとかではなくて、みんな同じへら釣りなんだから必須なんだ。どんな釣り方でも面白いんだから、食わず嫌いはもったいない。」と、北城氏は力説するのだ。

▲「へら鮒」91年2月、3月号。氏の記事は2月に。3月は表紙を飾っている。フィールドは勿論、横利根川。よく見れば、11月の取材時に二人が舟付けした場所

～北城 錦から江成公隆へのメッセージ～

「自分の場合、釣りのイロハは佐藤会長の連載*を読んで学んだ。憧れて入会した北斗で、さらに多くを得る事が出来たと思う。今の若い人たちの間では、最新のテクニックとか流行のテクニックとかそういうものばかり取り上げられがちだが、言わせてもらえば、新しいテクニックなんか何ひとつない。流行は繰り返すものであり、基本に大きな変化はない。現在の釣りの原型は、数十年前のゴールデンクラブ（北斗と同じく佐藤会長）で開発されたものが多い。有名な話ではまず麩エサ自体がそうだし、細かいことを言えば、『底釣りでタチを測る時のトップ1目盛出し』なんかでさえ、ゴールデンなんだよ。ムクトップの落ち込み釣りだってはるか昔にあったし、短ハリスだって大昔からあったんだ。先輩方の研究の上に今があるんであって、誰だって一人で釣れるようになったわけはないんだから、もし本当に新しい何かを発見したのなら、全てオープンにすべきだ。江成君もそれを忘れちゃいけないよ。他に、一般の人がまず出くわさないような、かなりレアなケースでしか通用しないテクニックを声高に語る人達が一部にいるが、疑問に感じる記事が多い。テクニックや理論の紹介という意味では構わないけれども、一般読者に誤解を与えるような書き方はどうかな。これはマスコミも悪いと思うけどね。そんなものは大きく取り上げられるべきものではない。今回の江成君の企画は、入門書と名人の釣行記のすき間を埋める記事にしたいという事だけど、なかなか面白い試みだと思う。ぜひ頑張ってもらいたい。はっきり言って今さらトーナメントでバリバリやるのはもう時間的にも厳しいだろうから、この企画に専念するのも悪くないんじゃないかな。すでにセット釣り編を書いてしまった江成君にはもう、そういう責任があると思うよ！」

*注「徳さんの実践釣り教室」のこと。元祖テクニック記事として、本誌で長年に渡って連載された超看板企画

北城 錦の底釣りゼミ①

～開講にあたって～

今回の取材は、内容があり過ぎてとても項目別に箇条書き出来るほど頭の整理がつきませんでした。そこで、一問一答ではなく会話風、授業風にアレンジしてみました。アレンジとはカッコいいですが、実はだらだら書けるので楽なんですね。「えな理論」もナシです。ノリは僕が小学生の頃にやっていた某通信教育のテキストのパクリです。会話である事を活かし、大事だと思う事はしつこいと言われるくらい何回もくり返し喋らせてます（笑）。文章中では一回の取材風景といった感じですが、過去10年間（といっても数回ですけど）に個人的にしていただいたお話と過去の氏自身の記事も、会話の中に盛り込んでみました。僕が知るのは、「北城ワールド」のほんの一部にすぎません。それでも皆さんに少しでも紹介出来ればと思い、仕事が終わった後は眠い目を擦りながら、休日は家族サービスもせず冷たい視線を浴びながら、ひたすらキーを叩きました。

今月分は話の「サワリ」で終わってしまいますが、来月号は「濃い」ですから、楽しみにしていて下さい。先は長いですが、ぜひ最後まで読んでいただきたいと思います。

ちなみに、今回からの底釣り編で使われる図は全て、過去の「へら鮒」からの転載です。過去記事の中には、諸先輩方の残した素晴らしい宝が埋もれているのです。

取材当日の11月7日、朝6時の待ち合わせ時間から出舟もせずに10時までの4時間、川から上がって1時間で計5時間も熱心にお話を聞かせて下さった北城氏と、長時間快く事務所を提供して下さった中島屋さんに、心より感謝いたします。

江成公隆

底釣りとは何か。

江：漠然とした質問ですみませんが、北城さんにとって底釣りとは何ですか？

北：メリットから言うと、底の方が宙より安定して釣れるケースが多い。好みで言えば、底釣りの微妙なウキの動きに魅力を感じるかな。もっとも最近では「微妙なウキの動きではない底釣り」がもてはやされているようだけど（笑）、歴史的な部分をふまえて話すとね、今の若い人達は知らないかもしれないけど、昔は「底釣り規定（完全底釣り）」というのがあったわけ。当時は今の「1m規定」と同じように広く一般的なもので、底釣りが出来なければお話にならない時代だった。2本のハリが完全に底に着いてからが勝負だから、早いアタリは違反になる。上バリトントンだって微妙だよね。よくモメたテーマだ。我々はそういう時代に育った世代だから、早いアタリや大きいアタリには手が出ないんだよ（笑）。（江成注：氏はもちろん手が出ますので。念のため）

江：今、メリットというお話が出ました。底の方が宙より安定しているという文章は、わりと多くの記事の中で目にします。これには色々な理由があると思うんですが、ズバリどうお考えですか？

北：寄せ効果で見れば、エサが底に溜まるので地合が続きやすい。流れがあっても宙に比べれば確実に差が出るだろう。魚の習性から考えれば、底に居るへらの方が警戒心が薄いためかな。

江：底のへらの方が警戒心が薄いんですか？

北：えぇ？　少しでも深い方が、もっといえば底面に近い方が魚が安心するのは、釣り全般の常識でしょう？

江：はぁ、常識なような気もするんですが…。宙との違いはそれだけなんでしょうか？　というのは、けっこう諸説ありますよね。僕なんか一生懸命いろんな記事を読むんですけど、混乱しちゃうんですよ。僕も含めて最近の若い人というのは、宙から覚えた人の方が多いと思うんですが、やっぱり最初に覚えた釣りを基準に底釣りを捉えたいと感じるものだと思うんです。それで、どこまで宙と底をシンクロさせて考えていいのかっていう事に凄く悩むと思うんですよ。僕の地元の同世代の仲間はみんなそうでした。で、宙と全く同じなら釣れるはずなんですが、まず最初は釣れません（笑）。今振り返るとタチもきちんと測れていなかったり、タナのイメージも全く湧かなかったりで、釣れるはずはないんですが。それでもだんだんと底釣り独特の感覚というものが分かってきて、いくらか釣れるようにはなってきます。ところが頭の中で宙と底が繋がっていない感覚が納得出来ないままなんですね。もちろん釣りの組み立て方やエサ合わせというのは宙と同じだなという感覚はあるんです。なんて言えばいいのか…。底釣りとは何かっていう事を生意気にも考えてみた時に、最初に宙を基準として底釣りを説明しようとした時の挫折がムクムクと頭をもたげてくるんです。そういう時に、「底釣りとは宙の～」なんていう話を見たり聞いたりすると、「何かあるんだナ」なんて考えてしまうわけですよ。

北：何もないと思うけど（笑）、まぁ気持ちはわかったよ。ちなみにどんな説が君たちを悩ますんだろう？

▲江成所蔵の年代物の「へら鮒」。
江成の書き込みの跡が分かるだろうか。
当時、底釣りにいかに悩んでいたかが伺える

既出の底釣り概論を再考する。

江：例えばですね、「底釣りは、本来宙層魚であるへらを不自然な姿勢（逆立ち）で釣る釣りである。そのためへらにとっては補食しづらい。これは、裏返せば器用な食い方（吐き出しなど）のしにくさに繋がり、結果カラツンも少なく、一日安定して釣り込む事ができる」なんてのがあるんです。いつ、どこで読んだか忘れましたけど…。

北：馬鹿言っちゃいけないよ（笑）。そんな説は後から理屈を付けただけだ。江成君は水槽で観察した事あるかい？　へらに限らず魚の多くは、底に落ちたエサってのは安心して食うんだよ。これはもう理屈ではない。魚の習性なんだから。へらにとっては、ちっとも不自然じゃない。食いづらいんじゃなくて、食いやすいんだ。エサも安定しているしね。少々合ってないエサでも釣れる理由はこれ。ちなみに、へらが安心して食うタナの目安はたまに食い上げが出るタナね。

江：もちろん「エサ安定論」も知ってますよ。でも、今の例も結構説得力あるような気がしてたんですよ。というのは、やはりよく目にするフレーズで、「底ならまだダンゴで十分でしょう」ってのがあるんです。「なら」とか「まだ」というニュアンスからお分かりのように、宙ではもうバラウドンのセットになっているようなシーズンの記事ですね。自分流の解釈では、「宙では粒子に酔う状態でも底なら食いづらいから、逆に芯に反応させる事が出来るのかな…。アレ？　ちょっと辻褄合わないなぁ…」とか。そうではなくて、「同じ開きのエサでも底に着いている方が宙で使うよりは拡散範囲も小さいだろうし、より固形に近いのかな…。なるほどこれが、使うエサの季節感が、底は宙よりちょっとズレている理由だ！」なんて感じてしまってたんです。安定だけなら、魚が遠巻きになっている時には関係ないと思ったもので…。

これでも、底釣りで固形のエサを使うケースが説明出来なくて困ってはいたんですが…。

北：いやぁ、しかしよく考えたね～。でもそれは江成君、考え過ぎだ（大笑）。まさに後付け。やっぱり魚の行動パターンというものを知る事から釣りは始まるよね。宙も底ももちろんへらのあしらい方は同じさ。でも、魚が一緒だとは俺は言ってないよ。つまり「どのへらをターゲットにするか」という事なんだよ。もちろん底のへらがイマイチの時だってある。いつも通用するわけなんてない。そんな時は別の群れ（宙）を狙うという選択肢もあるんであって、無理に難しく考える事はない。ちなみに一部に底釣り規定の池が残っているけど、かなりズルいよ。でもやるしかない（笑）。そういう所はね、上ズリ対策という意味もあるけど、ウドンなどの固形の釣りはやっぱり強いよね。今の話では、宙ではもうバラウドンという事だったけど、それはおそらく短竿浅ダナでの話でしょう。そういう時期に、沖打ちの両グルとかバラグルとかもやるでしょ？　みな同じへらならば、開くものにはもう反応しないハズだよね。まぁグルテンだからダンゴほど開く訳じゃないけど、固形ではないからね。どう説明するのかな？

江：あ、確かに。活性の高いへらを狙ってるんですね…。勉強になります。

北：全部を理詰めは無理だよ。相手は生き物なんだから。経験とは違う…「観察」も大事だね。管理釣り場出身の人は、変に難しく考える傾向があるね。もう少し初歩的な事（魚の習性）を押さえるだけで、悩まなくていい事はいっぱいあると思うんだけどな…。

今の話をもう少し考えてみようか。その時期って新べらが入ってる可能性があるよね。新べらは少し落ち着いてくると底に溜まるわけ。何回かはハリを経験してるかもしれないけど、元からいた旧べらとは比較にならない素直さと活性があるよね。そういうのをメインに相手にしてるんじゃないのかな？

江：そう言われてみれば…。

北：あんまり細かい事にこだわらなくていいと思うよ。実際の釣りに何の影響もないわけでしょ？　何でそんなに気にするのか、分からないよ。

江：だって、理由が書いてない事が多いんですもん…。初心者の頃は「なぜなぜ」ばっかりですよ。丸暗記は疲れると思いますよ。

北：…そうかぁ。今の若い人にとっては記事の中で言葉が足りないのかもしれないなぁ。「底ならまだダンゴ」というのだって、おそらくエサは「ダンゴの底釣り夏」や「冬」のことだろうから、これは厳密にはグルダンゴだしね…。でも、理由はわかったでしょ？

江：はい。でももう一つだけ確認させて下さい。「底釣りとは下ズリのない宙釣りである」なんて言う人もいるんです。こういう記事を見つける度に、「やっぱり何かあるゾ」って感じてた訳ですよ…。しつこくてすみません。

北：うーん。これ自体は別に問題ないと思うけどね。ちょっと目先を変えた表現をしたい人はたくさんいるから（笑）。まぁ江成君が感じたように、底釣りアレルギー（？）の人には変なプレッシャーを与える表現だと言えなくもないから、ちょっとフォローしておこう。この文章は、タナの作り方の話だよね。要するに宙より自動的にタナを凝縮出来るって事だ。他には何も言ってないでしょ。というか江成君の出したこの一文だけじゃ、軽はずみに判断しちゃマズいけど、たいしたことじゃないよ。きっと断片的な記憶の中で、いかにも格言っぽいから印象に残ってるんだろうけど、江成君はこういう言葉に惑わされ過ぎです（笑）。その日の宙の状態で底を予想することに無理がある。浅ダナから深宙を想像出来ないでしょ？　やってみたら別世界だったって事はよくあるよね。それと同じ事です。やっぱりある意味では、底は底だし宙は宙だよ。こういう結論になるのは、江成君としては納得いきませんか？

江：とんでもないです。降参です。

底釣りにおける「ナジミ」。

江：最近、「返してツン」という、バランスの底釣り全般での金言を否定する人が出て来ました。遅い釣りであるという批判ではなく、完全に否定なんですよ。

北：ハハハ…。水中はその人のイメージだからね。何言ってもいいけどさ。とりあえずこのセオリーは間違ってはいないと思うよ。俺的には「ツン」でも「チク」でもなく「返してムズや、ムッ」だけど、まぁいいや。これは後で話そう。「返す（戻る、戻す）」という動きは、ウキをナジませている要素が無くなる状態だと言い換える事が出来る。だから、「返すのはなぜか」という話をする前に、「ナジミとは何か」を考えるのが先だ。江成君、「ナジミ」って何？

江：宙釣りでのナジミ幅はエサの重み、つまり持ち具合を示します。エサがなくても魚にもまれて押さえ込まれていたり、風流れでシモったりする事もありますけど、基本的にはエサの目方です。底釣りではこれ以外に、エサが底に着いているために起こる摩擦でアンカーになり、ウキをシモらせていると言えます。このためにエサの目方が消えると思える位ズラしても、実際はナジミ幅としてウキに表れて来ます。これが初心者にはキツいんですよ。ズラしてもナジむからタナのイメージが湧かないし、底に着いているためにエサの目方も全てかかっている訳でもない。特にズラシ気味の完全底釣りともなれば、情報源となるトップの目盛り幅がより狭いんです。この幅で判断をしていけるようになるには、かなりの経験が必要になるんですね。

北：なるほど、ほぼ正解でしょう。ひとつ確認だけど、底との摩擦でアンカーになるっていうところで、まさかハリスと底の摩擦だなんて思ってないだろうね～。かなりズラしたってハリスは底には寝ないよ。これは水中ビデオを見ても明らかだ。もっとも完璧に落とし込めたとし

釣番付

料金表

50名まで	55,000円
51名～75名	60,000円
76名～100名	65,000円
101名～125名	70,000円
126名～150名	75,000円
151名～175名	80,000円
176名～200名	85,000円

・仕上がりは黒一色です
・人数は成績表部分のみ数えます

書体見本

1.ぐりへら鮒会
2.ぐりへら鮒会
3.ぐりへら鮒会

・番付をインターネットで公開できます（無料）

お問い合わせご注文はお早めに！

取扱店：柴　舟　03-3613-2727

ウキや小物の銘入れに

転写シール

初回注文黒一色、300銘で8,500円～
２回目以降同じものをご注文の場合は3,500円～

・8書体、8色を御用意しています
・角印も作れます

取扱店：
柴舟（東京都江東区）
03-3613-2727
佐伯釣具店（神奈川県川崎市）
044-911-3722
SANSUI川づり館（東京都渋谷区）
03-3499-5025
フィッシング中原（神奈川県川崎市）
044-711-8266
鮒仙人（神奈川県川崎市）
044-287-7470

お問い合わせ、ご注文は各取扱店
または下記HPまでどうぞ

office27
あとりえぐり

http://www.office27.com
E-mail:info@office27.com

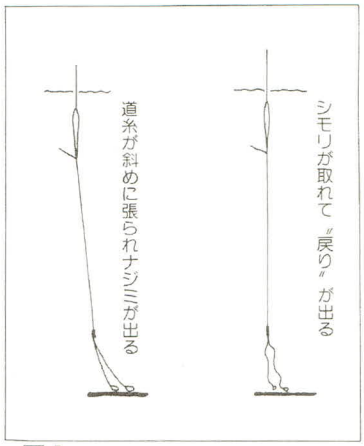

図1　〈へら鮒89年3月号P.190より〉

て、なおかつエサがオモリの真下に落下し、さらに全くの止水であれば寝る可能性はあるけれども。

江：はい。つまりハリスがオモリから斜めに緩やかに張っている。そんな状態がアンカーだと思います。だから、「這わせ」とか「ベタ」っていう用語は誤解を招くので使わないようにしないと（笑）。

北：その時、道糸もエサのある方向へいくらか斜めに引っ張られているはずなんだ。オモリから下だけの話ではないんだね。エサが（ハリス）がオモリ方向へ動くとウキは返してくるわけだけど、この時道糸も垂直方向（ウキの真下）へ動いているというわけ。今後は、仕掛け全体の角度の変化でウキはナジみもし、戻りもするというふうに意識しておいて欲しい。後でまた話すけど、これは結構大事な事なんだ。仕掛けの角度が垂直方向へ動く要素は、ナジませている要素が無くなる（減る）状態だから、今言ったエサの目方と摩擦によるアンカーが無くなるという事。エサはいずれ溶けるから、目方は減っていく。魚がサワっても溶ける。でも、サワリがもたらす効果はエサ溶けだけじゃなくて、エサを動かす効果もある。魚にあおられて底から離れたエサは摩擦が消えるために、引っ張り合っていたオモリ方向に引かれて行くわけだ。適度なズラシというのも戻す要素になる。オモリからエサまでの角度（ハリス）は直線ではなく重力でたるむから、これがテンションを減らす方向へ働くんだね。他には流れもあるね。これは逆方向に作用すればシモリとなるわけだ。

「サワリ」返し」だからこそのセオリー。

江：返してからアタるまでに1目盛の空白があるというわけです。その間にへらが別の動きをしていると。だから同じ目盛りでサワってアタるのがベストであると。

北：へぇー。その人落ち込みでの話しだった？ ズラシはどれくらい？

江：落ち込みですね。トントンが基準みたいです。

北：それなら少しは分かるかな…。受けを出させたままアタらせるように持っていくって事だからね。別に新しい話でも何でもない。もともとほとんどナジませないから戻りもないわけだ。厳密にはそういう釣りは、いわゆる底釣りとは言えないでしょう。仮にエサが着底していたとしても宙の延長、底ら辺釣り。構わないですよ別に。俺もやる時はありますから。ただ、そういう釣りを語るのならセオリーを否定しちゃまずい。比較するには条件が違い過ぎるんじゃないのかな。よっぽどへらの状態が良くなければ決まらないような釣りは、基本にはなり得ない。いつもその釣りで決まると言うなら話は別だけど。

江：いや、その…。両ダンゴ限定の話であって、その人も年に数回しか決まらないと書いてましたので…。

北：えっ、書いてるの？　それは愉快だね。他にも何か書いてあった？

江：上バリで食わせる事を考えて、下バリは調整用なんだそうです。エサ付けでコントロールするようですよ。

北：共エサだからどっち食ってもいいんだよ、本来はね。でも底釣りは地合が出来ると、片方のハリのヒット率が高まってくる。それは下バリだ。地合の維持という話と密接にかかわってくる。簡単に言えば、アタリを送るってことだけど。早くアタリが出るのは、早く張る方のハリス。それを送るから、もう一つのハリス、つまり下バリで釣れる事になるんだね。なぜアタリを送るのか。上ズリ防止でもあるし、場合によっては寄せの意味もある。これが、「遅い？」底釣りのリズムってやつ（笑）。

江：上バリに食わせるためのエサ付けの調整法なんかは、けっこう意外性があって納得してたんですけどね。

北：またまた後付け理論に呑まれてない？　大丈夫？　でも何で上バリで食わせたいのかな。

江：上バリは早くなじんでズラシも少ないので、早くて強いアタリが出ると。

北：底釣りでの強いアタリには、実は危険がともなう。これはズラシ幅の考え方のところで説明しよう。下バリは何するの？

江：下バリは物理的に上バリよりゆっくり落ちるから、興味を持たせて下を向かせるためのものと書いてましたね。

北：なるほどね。でも、エサ付けの差こそあれ上下同じエサなんだから…。狙い通りにうまくいくといいね（笑）。

江：先生、もしかして怒ってます？

北：怒ってないよ（笑）。ひとつの考え方として紹介すること自体は全く自由だ。さて、「返してからアタるまでの1目盛の空白」という言葉にされちゃったけど（笑）、普通の底釣りならば「返す」って事がサワリそのものである事があるんじゃないのかな。確かに返してからアタるまでにあんまり時間が空く時は、その空白論も悪くないと思う。でもサワリを出したへらが1枚とは思わないし、サワリを出したそのへらがアタリを出すかどうかなんて分からないけどね。サワリというのは、複数のへらがエサのまわりに来ましたよという前触れなんであって、だからこそもう食いアタリが出てもおかしくないですよ、という事だ。大昔の教科書通り。前触れなんて懐かしい言葉使っちゃったね（笑）。実際ズラシをある程度とっていれば、戻しはある程度出ている状態で釣るわけだから、1目盛も空白はないけどね。半目盛位の間でサワってアタるわけだ。

基本的な「ズラシ」の意味。

北：完全底釣りでも片ズラシでも、もっと言えば段差の底釣りでも、一般的に下バリはズラすよね。完全底釣りは段差がある以上、自動的にそうなるから当たり前だけど。これはエサの安定が狙いなのは分かるよね。ズラシの幅が大きい程、魚にとってはエサを吸い込みやすい。つまりオモリとエサの間の張りが、よりゆるやかな方が、より抵抗が少ないために吸い込みやすいし、サワった時にエサも自然に動くという事だ。「遊び」が必要だという事。

　またオモリとエサが離れれば離れる程、魚が下を向いた時にハリスやオモリに触れる率がグンと落ちるから、へらも安心する。糸ズレが減るから釣り人側でもメリットだ。

江：でも、あまりズラすと、アタリが出にくいですよね。スレも多いような気がしてます。ナジミ際のサワリも分かりにくいですし。魚の都合を主に考えると釣り人にとっては釣りづらくなってきますよね。どこで折り合いを付けるかって事なんですが…。

　僕はカラツン覚悟でもはっきりしたサワリ、アタリの出るトントン派ですね。北城さんの「魚の気持ちをまず考える」ってのは重々承知なんですけど…。

北：本気で言ってる？　理論派を自称するにしては、ちょっと甘いな。今の江成君の言葉は多くの人は聞き流してくれるかもしれないけどね。江成君の好みの問題ということで余計に何の疑問も感じないかもしれない。でも俺は聞き逃さないよ。底釣りのメカが全然理解出来ていない。がっかりだ（笑）。

江：ええっ？　そんなにやばかったですか!?

〈以下、次号に続く！〉

へら鮒

Monthly fishing magazine herabuna Contents

「へら鮒」の題字/叶 九隻

No.445 Jan.2003 1

●今月の表紙●
記念すべき大幅刷新号の表紙を飾ったのは、本誌「へらってヤバいわっ!!」が大好評連載中の、吉川ひとみちゃんです。この日は白水湖のミーちゃんにすっかり気に入られちゃったひとみちゃん。釣りの方も底釣り初挑戦で旭舟先生もタジタジの釣りまくりを披露！「熱血釣り女」っていうキャッチコピーはダテじゃないぜ!!

9 特集
栄光を掴んだ男達　PART I
シマノジャパンカップ2連覇達成　岡田　清
G杯争奪全日本ヘラブナ釣り選手権覇者　加治屋　浩
マルキュークラブ対抗へら鮒釣り選手権大会3連覇達成　田中雅司　岡野正基　糸井日出男

177 特集 II
冬の食わせエサを制覇する　ウドンのすべて　前編　伊藤洋一　戸張　誠　稲毛利夫　野本昌明

★編集部厳選・この冬楽しみたいスーパー管理釣り場!
6 field.1　野田幸手園（千葉県野田市）
7 field.2　椎の木湖（埼玉県羽生市）
8 field.3　柳生フィッシングパーク（群馬県板倉町）

16 新連載 名手・石井旭舟がいく、へら鮒出会い旅…　へらぶな浪漫街道
《第一回》戸面原ダム（千葉県富津市）

24 新連載 スーパーアングラー小池忠教のエサ合わせ大全
《Vol.1》晩秋の野田幸手園を両ダンゴで攻める!

34 新連載 杉山達也のSPLASH BEAT II
《Vol.1》羽生吉沼ミニ賞金大会で頭を獲れ!

40 新連載 田辺哲男の「それってどういうことよ!?」
《Vol.1》両グルでビッグフィッシュを獲る!
FA吉羽園（埼玉県幸手市）　ゲスト　棚網 久さん

42 新連載 頑固一徹!　自分の釣りを貫き通す男
《今月の釣り人》底釣りに徹する!　工藤節男さん

44,80 列島縦断　旅するカメラ
《千葉県28》富津市～丸山町周辺　相川のセキほか

114 棚網 久の対決mode 1, 2, 3!
《Battle.22》隼人大池で壮絶セット釣りバトル!!
challenger:遅沢 明　tournamenter:高橋道雄

122 熱血釣り女・吉川ひとみがいく!「へらってヤバイわっ!!」
《第7回》「底釣り初挑戦で大爆釣!?」筑波白水湖（茨城県つくば市）
GUEST:石井旭舟さん

132 新連載 大型狙いの楽釣宣言!　山内研作&生井澤 聡
《第1回》北部手賀沼（千葉県）

138 第24回　G杯争奪全日本ヘラブナ釣り選手権　柳生FP

140 釣りクラブ見参!
《第41回》へら鮒美学研究会　将監（千葉県栄町）

142 上州屋グループへら鮒用品充実店紹介
《第26回》フィッシングジャンボ秋田外旭川店（秋田県）

★野の風景
182 横利根川（茨城県／千葉県）
184 戸面原ダム（千葉県富津市）

186 新連載 西日本川釣り紀行　北川穂積
第1回　丙川（岡山県）

190 新連載 竹は活きている
①延べ竿がすべての根源

192 新連載 フィッシングレディ
竹越由香さん　筑波湖（茨城県明野町）

50 新連載 荘野諒爾　へら鮒釣り　何でも相談室
《第1回》冬の釣りでの疑問点を説き明かす

52 江成公隆のトーナメンター、復活への道。
佐原水郷が生んだ奇才・北城 錦登場!!
《Vol.7》北城 錦の底釣りゼミ① in中島屋（!?）

58 ガッツ小林が攻めまくる　若さとファイトの激釣記
《第6回》円良田湖（埼玉県寄居町）

62 新連載 本誌イケイケ編集長が斬る!　業界のタブーに迫る!!
《第1回》どうしたらモニターになれるのか?

66 新連載 GOZYUKKAMI TREASURE HUNTER アマヤン　天野正由
《その1》G・T・H　アマヤン誕生!　精進湖&田貫湖

72 水辺のプラネタリウム　吉本亜土
《今月の星空》一遍聖絵

78 新連載 旅するカメラ　取材番外　思い出話
《第1回》取材出発前の下調べは楽しくもあり…

83 新連載 電話で突撃!!　関東近辺釣り場情報

★エリアレポート
86 裏の谷池（福岡県）　河口正伸
88 和気の池（石川県）　山本一朗
89 水藻FC（大阪府）　前田誠志
90 三川フィッシュパーク（岐阜県）　後藤 誠

92 野田幸手園新聞

97 新連載 元気が出るへら鮒　西田美明
《第1回》「関西のオバハン」の巻

102 ワクワク管理釣り場情報

106 小売店情報

109 読者投稿　台湾日鯽釣事情　後編
千葉県　高橋謙司さん

145 竹、合成竿を使用した　未開の釣り場 釣行記
《その10》栗原の釣り場（茨城県常陸太田市）

152 新連載 野べらはいずこ…　人間カーナビ稲毛利夫の実釣! 釣り歩き
《第1回》長学寺近くの野池（群馬県富岡市）

156 読者投稿　私たちは本当にへら鮒を釣っているのだろうか?
静岡県　小川魚考さん

158 好きです!　へら鮒釣り!　松戸 健
《人物往来43》戸張　誠さん

★へら鮒BOX
161 新里ちゃんの新米編集長雑記
162 情報地獄ミミ
164 ボイス
169 セッキーのちょっと一息
170 新わが輩はへら鮒である!
171 プレゼント発表
172 釣果予想クイズ

175 広告索引
176 編集後記

平成15年1月1日発行（毎月1回1日発行）　第38巻 第1号　昭和41年5月4日第三種郵便物認可

へら鮒釣りの楽しさを追究し続ける…

へら鮒

Monthly fishing magazine herabuna

No.445
Jan.2003
1

特集 彼らはいかにしてメジャートーナメントを制したのか？

栄光を掴んだ男達 PART I

●シマノジャパンカップ2連覇達成●
岡田 清

●G杯争奪全日本へラブナ釣り選手権覇者●
加治屋 浩

●マルキュークラブ対抗へら鮒釣り選手権大会3連覇達成●
田中雅司　岡野正基
糸井日出男

特集Ⅱ 冬のクワセエサを制覇する!! ウドンのすべて 前編
伊藤洋一/戸張 誠
野本昌明/稲毛利夫

怒濤の新連載、一挙スタート！
誌面大幅刷新敢行
石井旭舟/小池忠教/杉山達也
山内研作＆生井澤聡/田辺哲男
北川穂積/西田美明/稲毛利夫/天野正由

好評連載中！
吉川ひとみ DUEL GIRL がいく！
「へらってヤバイわっ!!」

吉川ひとみin筑波白水湖。
底釣り初挑戦で大爆釣!?

昭和41年5月4日第3種郵便物認可
第38巻第1号（毎月1回1日発行）
平成15年1月1日発行

へら鮒

Monthly fishing magazine heraburna

1
2003

特集 栄光を掘んだ男達 PART

岡田清 加治屋清
田中雅司 糸井日出男 岡野正基

定価 一000円 本体九五二円

株へら鮒社

アッと驚く

アッと驚く5つの力！

アッと驚く、使いやすさ！
ビンから一粒取り出して、そのままハリ付けすればOK。
使いたい時、すぐに使えて便利です。

アッと驚く、ナイスな重さ！
「感嘆」より重く、「感嘆II」や「彩」よりも軽い。
使い分ければ、幅広い釣況に対応できます。

アッと驚く、常温保存！
余っても、常温で保存できます。
ビンのフタをしっかり閉めておけば、次の釣行にも使えます。

アッと驚く、付けやすさ！
ベト付かないから、ハリ付けのしやすさが抜群。
冷たい水に指を漬けなくてもOKです。

アッと驚く、食いのよさ！
出来合いのくわせエサとは思えない、悔れない食いのよさ。
この冬、手放せなくなること間違いなしです。

力玉（ちから だま）

力玉（ちから だま） ¥400

12月新発売!!
アッと驚く、限定発売！ 3月までの冬期限定発売。

携帯電話をサッと一拭き！ 「㊙オリジナルモバイルクリーナー」
プレゼントキャンペーン、実施中！
詳しくは「力玉」の商品ラベル、または店頭広告をご覧ください。

つれるエサづくり一筋
㊙マルキュー

本社・桶川工場 埼玉県桶川市赤堀2-4 〒363-8509
TEL：(048) 728-0909(代) FAX：(048) 728-3909
大阪支店 大阪府寝屋川市楠根南町12-14 〒572-0811
TEL：(072) 824-0909(代) FAX：(072) 825-0909
四国営業所 香川県坂出市西大浜北3-4-33 〒762-0053
TEL：(0877) 44-0909(代) FAX：(0877) 44-3909
九州営業所 佐賀県鳥栖市姫方町341-8 〒841-0023
TEL：(0942) 82-0909(代) FAX：(0942) 83-0909

http://www.marukyu.com/
釣り場でエサに困ったらiモード・ホームページ
http://www.marukyu.com/i

雑誌 07907-1
T1107907011005